

## マアジ *Trachurus japonicus*

県内外を問わず、広く消費される代表的な大衆魚です。高知県では幼魚をアジゴ、アジジャコ、ゼンゴ、成魚をアジ、ヒラアジなどと呼びます。外見がマアジによく似ているマルアジは県内では一般に青アジ、同じく似ているメアジはトツパクと呼んで、マアジとは区別されます。刺身や塩焼き、揚げ物で利用されるほか、干物やすり身にも加工されます。

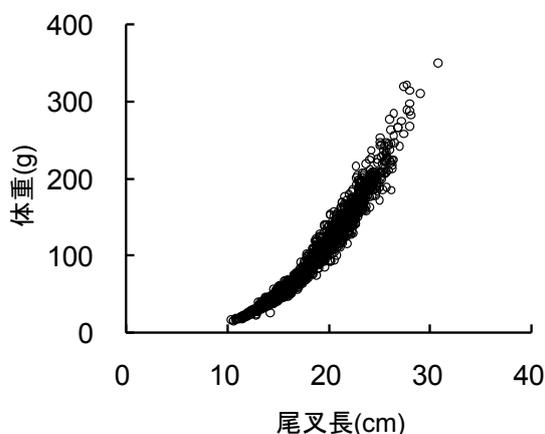


図1 高知県産マアジの尾叉長と体重の関係 (平成17年~22年)。

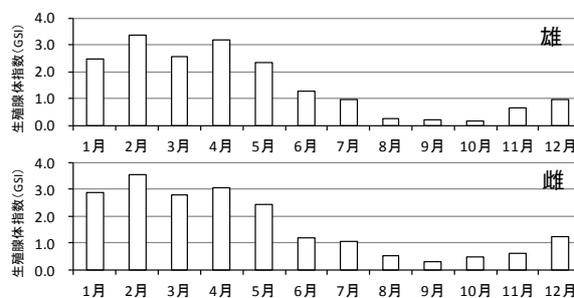


図2 高知県産マアジ (尾叉長18cm以上) の生殖腺体指数 (GSI) の月別平均値。

### 生物特性

マアジは日本各地の沿岸と東シナ海、朝鮮半島沿岸に分布します。高知県で漁獲されるマアジは太平洋系群に属し、東シナ海で生まれたものと太平洋沿岸で生まれたものから構成され、1年で尾叉長18cm、2年で24cm程度に成長します。寿命は主に5歳前後ですが、10歳を超える魚もいます。産卵期は1~6月とされており(阪地2001)、尾叉長18cm以上の成熟指数(生殖腺体指数)から、産卵盛期は1~5月です(図2)。1歳で50%、2歳ですべてが成熟します。

### 資源動向

マアジ太平洋系群の資源量は1990年代にかけて増加し、平成8年(1996年)に16万トンのピークを迎えました。しかし、その後、減少に転じ、平成27年(2015年)の推定資源量は4.4万トンとなっています。平成28年度の資源評価で水準は「中位」、動向は「減少」となっています。

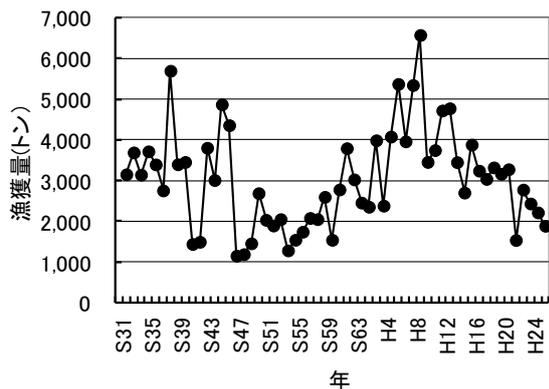


図3 高知県下におけるマアジ漁獲量の推移（昭和32年～平成26年）。

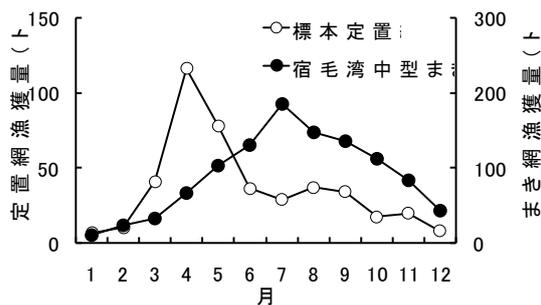


図4 標本定置網と宿毛湾の中型まき網によるマアジの月別漁獲量。（平成11年～平成20年の平均値で示す）。

### 県内の漁獲動向

高知県内におけるマアジ漁獲量は、1970年代以降に増加し、平成9年（1997年）に6,577トンのピークを迎えました（図3）。その後減少傾向に転じ、平成26年（2014年）は1,889トンと昭和60年以来29年ぶりに2,000トンを下回りました。

漁獲の大半は宿毛湾の中型まき網と、各地の定置網が占めています。宿毛湾の中型まき網では、春から漁獲が本格化し、夏にピークを迎え（図4）、定置網では4～5月にピークがあります（図4）。

本県で漁獲されるマアジは0歳と1歳が大半と考えられます。宿毛湾のまき網では、ある年の下半期に漁獲されたゼンゴ銘柄の水揚量が多いと、その翌年の上半期のゼンゴ水揚量も多い、という関係があります（図5）。高知県水産試験場では、この関係と高知県内外の漁業情報を総合し、半年間程度の漁況予測を行っています。

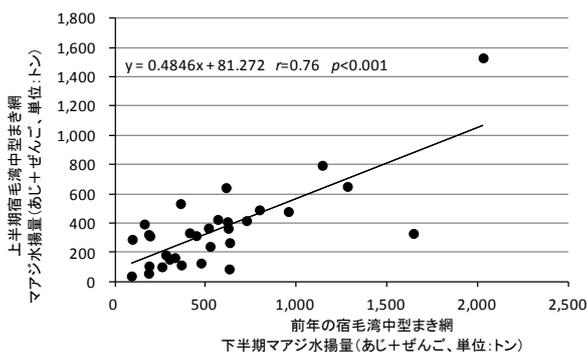


図5 宿毛湾の中型まき網によるマアジ漁獲の前年下半期と上半期の関係。

また、マアジの漁況は海況の影響を強く受けることも指摘されています。黒潮からの分枝によって暖かい水が沿岸へ波及する、いわゆる「暖水波及」があると、まき網漁場や定置網にマアジが来遊して好漁となることがあります。